

## 審査の結果の要旨

氏名 濱中 淳子

大学院制度の充実は 1990 年代以降の日本の高等教育政策の最大の焦点の一つであり、中央教育審議会などの議論をもとに制度的な改革が行われてきた。その中軸をなすのは、計画的な授業、成績の厳格化など、いわば大学院教育の標準化・フォーマル化であるといえよう。しかしそうした改革は必ずしも現実の大学院についての実証的な分析に基づいて策定されたものではない。そうした観点から本論文は、とくに工学系の修士課程に焦点をあてて、学生、教員、卒業生に対するアンケート調査をもとに、大学院教育の問題点と改革の可能性を実証的に分析しようとするものである。論文は 8 章からなっている。

まず第 1 章で課題を整理したうえで、第 2 章では工学系の修士課程の規模拡大の過程を、個別大学の学生数のデータベースをもとに論じるとともに、文科省の学生生活調査から、大衆化を反映して大学院生の生活が変質してきていることを見出している。

第 3、4、5 章は、三つの大学の学部・大学院卒業生調査のアンケート結果を用いた分析である。第 3 章では学部から大学院への進学者の特性と、その年齢コホートによる変化を分析することによって、大学院進学者の専門的な学習への意欲が低下してきたことを見出している。第 4 章では、工学系に固有の研究室での集団に属して研究に加わり、また学習するという学習スタイルを「研究室教育」としてとらえ、それが学生の学習意欲を高め、さらに基礎的な知識や専門知識の獲得にプラスの影響を与え、また自らの学習の評価をも高めていることを示した。第 5 章ではさらにこうした観点から大学の類型による相違を分析し、上述のようなスタイルによる教育の効果にもかかわらず、とくに選別性の高い大学において学生の不満が高まってきていることを示した。

第 6、7 章は、十五の大学の大学院生、教員に対するアンケート調査をもとに分析を行っている。第 6 章では学生の大学院教育に対する満足度を中心として、とくに選抜性の高い大学において現在の教育に対する不満が強いという、卒業生調査からの分析と同様の傾向を見出している。また第 7 章では、学生は一方で授業の導入による教育の体系化については積極的ではなく、この点では従来の集団モデルの学習の価値を評価しているものの、そうした学習スタイルが他面で教員とのコンタクトの希薄さ、学生の主体性の軽視をうみ、それが学生の側での不満を作り出していることを示した。

以上の分析をつうじて本論文は、工学系の大学院修士課程教育における「研究室教育」がもってきた重要な教育機能を明らかにする一方で、そうした機能にいま重要な問題が生じていることをも示すものであり、今後の大学院教育のあり方を論ずるための重要な基礎の一つを形成するものである。分析の基礎となる学習についての理論的枠組み、「研究室教育」のもつ問題点への分析、また論文全体の政策的な含意などについて、さらに深めるべき論点があることが指摘されたが、これまで実証分析のきわめて少ない分野において新しい展望を開いたことは高く評価された。このような観点から博士（教育学）の論文として十分な水準に達しているものと認められる。